

アメリカの大学教師と学生

川 合 治 男

二月も下旬になり、きびしい寒さも、もう峠を越したことだろうと思います。東京は、例年になく大雪が降ったと、友達から聞きましたが、お元氣のことと思います。こちらは、比較的暖い日が続いています。先日は-15.0になり、この時は、あまりの寒さにびっくりしましたが、三、四日すると、ポカポカと春のように暖くなり、とうとう13.0という新記録、その後も変化がはげしかったのですが、予想していたより暖かです。どんなに寒くても、どこもエアーコンディションが完全ですから、日本の冬よりずっとしのぎよいと思います。

この十八、十九日と、恒例の International nights という年一度の催しがあり、日本も参加しました。各自が、人形やら焼物、その他日本を紹介する物を展示し、ステージでは、柔道の黒帯を持っている二人が、実演をして、かなり受けました。数十ヶ国、六百人位の留学生なので、各国の珍らしいものが数多く展示され、お国自慢のファッションショーとか、民謡、ダンスなど、SIU ならではの規模で、盛況でした。展示場で、おりがみを、いくつ

か飾っておいたら、みんなから教えろという注文で、もっぱら鶴を教え、好評でした。岡崎から持ってきた小さな石灯ろうに、豆電球をつけて展示したら、ぜひ売って欲しくないかなどという人も、出る始末でした。

今学期は、図書館学コースと、プログラム学習のコースを取っています。図書館学の方が、厄介もので、時間ばかり取られます。中間試験が終り、期末まで一ヶ月足らずとなり、アサインメントの量も増えてきました。これからは、非鳴の連続と思います。

ところで、期限延長の件ですが、その後、はっきりしたことは、フェローシップを、IIIE (フルブライトの協力機関) からでなく、大学から直接受けている者は、大学の規約に従うことというのですが、SIUでは、同一人に二年に亘って、フェローシップを出さない規定です。一月に、チェアマンに、延長を頼んだら、すぐに引受けてくれたのに、担当のオフィスから、チェアマンの所へ、手紙で、延長はできないと、知らせて来たというの

です。それで、何とか他の手段を講じなければならないのですが、なかなか簡単にはいきません。ひとまず、来年度の授業料免除だけでも申請するつもりです。

さて一月末に、庄司さんより雑誌論文を、送るように知らせてくれたので、週末を利用して、思いつくままに書いてみました。アメリカの教育の実情といっても、他の大学のことはわからず、また、この大学でも、受けた講義のことしかわからないので、今は、こんなことしか書けません。春休み（三月中旬の九日間）なら、もう少しまとまものが書けると思うのですが。

それでは夜もふけてきましたから、このへんで。

（二月十九日夜、富田に宛てて川合）

Southern Illinois University は quarter 制をとっており、四単位のコースは週四日、一日五十分が普通である。教師は、クラスの開始前五分には、必ず教室に入っていて、終業のベルまで、みっちり講義をするので、十分の休み時間に教室を移動するのは忙しい。学期前に時間割を組む場合、建物の位置を考慮しなければならぬ。

教師の講義準備は、非常によくなされている。講義中に使う教材、たとえば、新聞雑誌の切り抜き、モデル・レコードフィルム等々が、綿密に整えられている。どの教室にも、A V 教具の設備があ

り、それが活用される。小学校、大学の別を問わず、最近のアメリカ教育で特徴的なことは、A V 教具の活用ということであるが、それが、Title II を契機として、いっそう充実してきている。これについては後で述べることにする。

講義は、五十分とは言っても、ノートの量はかなりあり、手を休める暇もないくらいである。その講義の中によくディスカッションが、織り込まれている。学生は、発言をしなければ損とばかりに活発に手をあげ、どんな幼稚な発言でも憶せずする。教師の方も、時には、小学生に与えるような質問をする。それでも彼等は、声を揃えて答えるあたり、まったく柔順である。誰もが講義に神経を集中しており、指名されて、「わかりません」と言うのを、聞いたことがない。

教科書は、「一コースにつき、二、三冊指定される。学部は、textbook service から、それらが貸与される。また、図書館の reserve room には、教師の指定によって、コース別に何冊かのテキスト、論文のコピーが reserve されており、それを読むことが義務づけられる。時には、教師の方から、「reserve room の誰々の論文を読み、そのコメントを提出せよ。」というアサインメントが出される。アサインメントの量は、たいへんなもので、そのために、図書館は、いつも学生でいっぱい。後で述べるように、図書館が充実しているので、教師の方もアサインメントが出しやすいから

であろうか。indexとか bibliography にある本は必ずあると言ってよいであろう。要求されたアサインメントを提出しないとか、期限内に遅れるということは許されない。提出したアサインメントは、ほとんど評価をつけて返される。教師の方も、学生の苦勞に報いるためか、提出されたアサインメントをきちんと調べるので、学生も熱を入れることになる。reference のコースで、アサインメントとして与えられた十五問題の解答を、二十種類くらいの百科辞典のひとつひとつで調べて、カードにタイプして提出したら、教師は、その一つ一つを、原本にあたって調べて、ページ類の違いまで、訂正して、 $A + B$ という評価をつけ、更に一人一人コメントして返された。教師は、後で、「カード一枚一枚が正しかいどうか、図書館の四階に行ったり、地階に行って、確かめた。」と、言っていた。このようなアサインメントの粗点と、中間や期末試験、更にコースによっては、途中数回ある試験などの合計点によって、一学期の成績がつけられる。アメリカでは、成績が、かなり重視され、学部や大学院入学の条件も average 三・〇とか、三・七以上と規定され、scholarship の応募条件も、四・〇と、はっきり規定されている。だから、成績が大きな関心事で、よく B student とか、C average とかいう言葉を耳にする。教師が、「明後日テストをする。」と、言おうものなら、彼らは、サッと緊張し、すぐに「どんな形式の問題か。」「どんな内容か。」「どのくらい長さか。」

などと質問が出るあたり、日本の高校の、教室風景を、思い出させる。

図書館

前述のように、図書館は、アサインメントをかかえた学生で、いつもいっぱいである。蔵書数百万冊を越している七階建の図書館は、キャンパスの中心にあり、文字通り、大学の心臓というべきものであろう。内部は、Education. Science, Social Studies, Humanities に、大別されている。雑誌は、アメリカで発行されているものは、必ず購入するという方針であるし、外国の雑誌も、アメリカのそれに劣らないくらい多く集められている。NEA Journal, Library Journal など、創刊号から、完全に製本されていることは、言うまでもない。

人文系の研究をする者にとって、アメリカが特に恵まれている点は、index とか bibliography などの reference が、行き届いていることである。たとえば、プログラム学習に関する論文を調べたければ、毎日発行される Educational Index を見ると、プログラム形式、反応様式、教科別プログラムなどの項目別に、論文題目と、掲載雑誌名がリストされており、それらが必ず、図書館で、手に入るのである。ここにある index と bibliography を数えてみると、四十種類を越している。たとえば、Reader's Guide to Periodical, Books in Print, Free and Inexpensive Learning, Ma

terials などである。日本でも、同じ研究をする者の便をはかってもっと index などのサービスを、徹底させてもいいのではなからうか。

また、その他のサービスも、ここでは、行き届いている。館内で働いている人の数は、非常に多く、そのほとんどが、学生のパートタイマーである。本を読み終ったら、そのまま机の上に置いておけばよい。すると、パートタイマーが、手押車で集めて回り、書棚に戻す。貸し出しは circulation table で ID カード (学生証) を、添えて出すと、IBM コンピューターに ID カードをかけるだけで OK。返却は、一階のあちこちにある箱の中へ、入れるだけでよい。図書館の本の回転率が、きわめて高いわりに、貸し出し、その他の手続は、きわめて簡単である。各階に、数ヶ所 lounge があり、また、group study room というものもある。lounge では、ただ何もしないで、タバコをふかしているという学生は、あまり見られない。彼らは、どんな時でも、ノートや本を読んでいる。これは、アメリカへ来た当初、特に目立ったことである。それも、どこでも所構わずである。電話を待つ間でも、次の講義室が開くのを待つ間でも、あるいは、食事を終えたキャフテリアの片隅でも、少しの間間を利用して、ノートや本を読んでいる。そういう者の便をはかって、ソファが、至る所に置いてあり、建物全体が、快適に設計されている。

ここ十年来の傾向として、図書館は instructional materials center という性格を、強くしているという。これは要するに、拡大された図書館という概念で、書物だけでなく、あらゆる教材教具を所有するものである。その一部として、この大学で注目されているのは、地図の収集で、地形図、地球儀モデルを含めて、二万種類に及び、全国でも、一番大きな規模であろうという。その他、スライド、レコードマイクロフィルム、なども、多数集められている。

Illinois Library Association, American Library Association などは、学校図書館の基準を、こまかく規定しているが、その中で AV に関するものは、次のようになっている。16 mm 映写機—生徒三百人につき一台、八ミリ図書館に一台、スライドプロジェクト—二教室に一台 (小学校) 五教室に一台 (中学、テープレコーダー—三百人に一台、一校舎に一台、スクリーン—二教室に一、オーバーヘッドプロジェクター—二教室に一台 (小学校)、五教室に一台 (ハイスクール)、ラジオ二教室に一台、一校舎に二台、TV—五教室に一台、一校舎に二台、また教材を使いやすくするために、AV センターを設けることも、勧告している。

視聴覚教育

図書館の中には A. V. Center がある。ここでは、フィルム、スライド、その他の収集、製作、貸し出しをしている。各教師は、講義に使えるフィルム、スライドなどを、リストから選び、センター

に申し込むと、センターの職員、またはパートタイマーが、三輪車で運んでくる。数々の白い小型三輪車が、キャンパス内のあちこちを、走り回っているのをよく見かける。教室内に、オーバーヘッド、オペークプロジェクターがない場合も、センターから借りることが出来る。希望通りのスライドがない場合は、センターに、アイデアを伝えるだけで、きれいなスライドを、作ってもらうことができる。教職教養に必修なAVのコースでは、自家製作の映画、スライドを、よく利用している。また、E. B. Coronet, Magraw-Hillなどの教育映画は、小学校から大学レベルまで、かなり豊富にあり、講義の中で、これらが、盛んに活用されている。アメリカの教育用 film, filmstrip の中には、無料で提供されるものも多く、それらの無料フィルム、スライドなどの bibliography も発行されている。たとえば Educators Guide to Free Films, Educator's Guide to Free Tapes. などである。このように、AV教育は、非常に進んでいるのだが、それに更に、拍車をかけたのだが Title 11 である。

ふつふつ Title 11 というのは The Elementary & Secondary Education Act of 1965 (ESEA) Public Law 89-10 の Title 11 ということである。ESEA は、初等中等学校における教育の質と機会を強化し、改善することを目的とし、そのために、図書館、教科書、各種の教材を、充実させようというものである。ESEA

の Title 11 は、次のことを、規定している。

「図書館の資料、教科書、その他の教材は、(1)初等中等学校の生徒教師が、公正に、必要な時はいつでも用いられるように、作られていなければならない。(2)質のよいものでなければならない、(3)生徒教師の要求に合ったものでなければならない、」Title 11 によって、U. S. Commissioner of Education は、各州に、六十五年以後五ヶ年、連邦資金を、与えることになっている。初年度は、百万ドルのうち五万ドルがイリノイ州に渡された。州に与えられる金額は、生徒数に応じて、決められるのである。この大学の AV Center で注目されるのは、在庫のフィルムを、常時、学生に公開することである。毎日、昼休みには、図書館の講堂で、AVC のフィルムが、上映される。ディズニーとか、EB (Encyclopedia Britannica) の自然科学、地理シリーズなどが多く、そのスケジュールは、新聞や、パンフレットで、発表される。先日のぞいてみたら、学生が、数十名入っていた。更に、このセンターの活動の一つとして、講義中に、フィルムの映写をすることがある。Lawson Hall という講義専用の円形の建物は、中心部が機械室になっていて、そこから、周囲の教室のスクリーンに教師の求めに応じて、フィルムを、映写するのである。教室の前面の壁は rear Projection Screen で、なっていて、三台のプロジェクターを、同時に使って、三つの画像を、映写できる大きさである。時には、その横に、オ

バーヘッド用のスクリーンを使うこともある。ここで機械を、操作しているのは、パートタイムとか、グラジュエート・アシスタントなどであり、教師が、教材の準備をよくしていることと、彼らとの連絡が、よくとれていることなどから、講義が、停滞することなく、スムーズに進められる。

プログラム学習

プログラム学習の研究は、依然として、さかに行なわれている。それらの中で Skinner の *Analysis of Behavior* は、大学の教科書として使われているし、*English 26000*, *English 3200* も、学生に使われている。学部を卒業する者、マスターの学位を取ろうとする者は、*Testing Service* が、毎学期、行なっている *English qualification test* を、パスすることが、条件となっているので、アメリカ人の *graduate assistant* でも、このテキストを借り出して読んでいる。図書館には、多くの *Programmed text* が、集められているが、小学校から大学までの教科書、中でも数学と、語学が多い。小学校低学年用には、プログラム化した物語のシリーズがある。*Textbooks in Print* 六十五年版を見ると、その年に出版された *programmed material* は、二百五十種を越している。

この大学から、プログラム学習に関する研究で学位を取った Dr. Woelflin は、図書館学の講義用に *card cataloging* のプログラ

ムを作った。これは *branching* 形式で *random access slide projector* を用いている。このスライドはもちろん A V C が作ったものである。二台のプロジェクターを使うことによって、三百二十フレームまで収めることができる。*branching* 形式だと *by-pass* 作りや *paging* がたいへん複雑になるが、彼は図書カードを入れる、*book pocket* のようなものに、順に番号をつけて板一面に張りつけ、それに各フレームを印刷したカードを入れていくことによって、同一ページ数の重複やら混乱を避けている。Dr. Woelflin のプログラムの中には、フルート演奏法プログラムがある。これは主として指の押え方を教えるもので、生徒にフルートを持たせて、プロジェクターの前に座らせる。各フレームの右の部分には、指の押え方や、鍵盤のキーとの対応関係を示す写真がある。これも A V C が製作したスライドである。

この大学には *Self Instructional Center* があり、学生に常時利用させている。各教科専門の人たちの協力によって *Audio Visual Department* のスタッフが作ったプログラムが、テキストブックとテープに収められており、学生はブースの中でいつでもそのプログラムを使える。このスタッフの話だと、いちばんよく利用されているのは、フランス語、スペイン語、ドイツ語などであり、初級、中級、上級まで全部揃っている。また講義に直接関係あるプログラム、たとえば統計学、会計学なども多い。時には教師が成績のよく

ない学生に、このセンターのプログラムを利用せよと指示することもあるという。この所長は、オクラホマのある大学でも、Self Instructional Center を作ってかなり経験もあるらしく、今はこの大学で、ドクターコースの学生として Dr. Woelflin の講義に、つっしょに出ている。

Dr. Woelflin の講義は、各自が持ちこった情報をもとに、もっぱらディスカッションを進め、その間めいめいプログラミングの作業を進めていくものである。十人の学生は、それぞれプログラム学習について、かなりの興味、知識を持っているので、ディスカッションの種はつきない。今のところ、プログラミングの他に、あちこちに発表された論文を分類してカードを作る作業を進めている。

Educational Index にのっている論文の数は、五十を下らない。日本とちがって、プログラム学習の研究は、依然さかんであることは事実である。

しかし最近はい programmed text が市販されることが少なくなった。というものの、それは決してプログラム学習がなされなくなったことを意味するのではなく、より個別的なプログラムを、教師たちが独自で作る傾向が強いのである。そして彼らの研究の焦点はほとんど「Computer Assisted Program (CAP)」である。プログラム学習が研究されるようになってから十年、その間、さまざまなプログラム形式、装置などが考えられたが、それらには欠点も

あり限界もあったので、理想的な self instruction のためには、是非ともコンピュータが必要であることは、最初から明らかであった。Software など所詮、経費を節約するためのものにすぎずプログラム学習の原理からみて、それは automated self instruction という概念とは、ほど遠いものであった。それがやっと CAP の研究が本格的になされるようになったのである。ライフ誌（六七年一月二十七日）で紹介されたように IBM 1500 が新しいものとして注目されている。これはテレビに似たスクリーンに写し出された選択肢の一つを、えんぴつのような棒で押すと次のフレームがあらわれる。スクリーンが二面あり、一方の絵なり文章なりを見ながら、他方のスクリーンに反応していく。ヘッドフォンを使い、音声による教授も受けられる。ハミリフィルムを使うので、二、三万フレームまで収めることができるという。IBM の説明会の話ではフロリダ州立大、テキサス大、シカゴの科学研究所にセンターを設けて、一般に使用させているし、その他の大学とも協力してプログラムを開発しているという。しかしいちばんの難点は、一時間あたり二ドルの使用料である。いくら量産によってコストダウンしても、この経済的な問題は、プログラム学習にいつまでもつきまとうであろう。

学生生活

最後に学生生活一般について少し触れてみよう。アメリカの学生には、家庭教師などというアルバイトがないかわりに、大学が学内で、さまざまな仕事を提供している。人件費が高いというアメリカなのに、学内ではいたるところに人が働いている。詳しい数字は手許にないが、その大半が学生である。どのオフィスでもキャフェテリアでも、彼らが *May I help you, sir?* と応じる態度は気持ちよい。給料は、学部学生が一時間一ドル、大学院が一ドル十五セント、その後、経験に応じて額がふえていくということである。

大学院学生で成績のよいものは、ティーチングアシスタントか、リサーチアシスタントになる。アシスタントは、週二十時間働くことを義務づけられ、月給が、百八〇ドルから二百七〇ドルまで各種ある。学部的一般教養は、ティーチングアシスタントが担当しているものが多い。学科によっては、教えないティーチングアシスタントもあり、彼らは、教授の秘書的な仕事をしている。

キャンパスはあらゆる意味で、学生の生活の中心である。学生の生活は、すべてキャンパスを中心としており、学生と大学とが、密接に結びついている。その結びつきを強めているものに三つの要因が考えられる。一つはスポーツである。アメリカの大学では、陸上競技から、体操、その他何でもほとんどが二校対抗である。種目別にシーズンのスケジュールが最初から出来上っていてその半分以上、自分の大学で試合するようになっていく。各大学は *Big Ten* とか

Mississippi Valley Conference とかの一つに属していて、対抗試合の成績でリーグ内の順位がきまる。それにもとずいて、UPI とか AP が、記者投票によって全国的ランキングがきめられ、毎週発表される。そこで、学生はこのランキングに関心を持ち、いやが上でも愛校心をかきたてられる。冬はバスケットボールのシーズンで、試合の時は、学生や一般市民で、体育館が満員になる。入場料五十セントから一ドル五十セントで、その収入は、選手の奨学資金の一部にするという。大学当局が、スポーツに注ぐ熱意はたいへんなものである。プラスバンドにかなりの金をかけ、それが *cheer leader* やバトンガールなどを伴って応援する。ハーフタイムにはアメリカ人お得意の美事なマスをゲームをしたり、ショーをしたりでみんながキャンパス内でスポーツを楽しむことができる。

もう一つの要因は大学新聞である。新聞はジャーナリズム科が主体となつて、週五日発行するのであるが、これが大学の公式な情報機関の性格も持っていて、学校側の通知などを新聞で知ることができる。逆に、新聞を読まなかったために、当然しなければならぬ手続をしなかった時には、たとえ、「誰も連絡しなかったから、」と言っても通らないのである。いわば半官半民の性格を持った新聞と言えよう。この新聞が自校のスポーツの成績はもちろん、卒業生の動向、教授、学生の動きから、病院の入退院者、市民の死亡記事に至るまであらゆることを掲載する。大半が寮やアパート住まいの学

生は、あまり他の新聞は読まないようなので、大学新聞の及ぼす影響は、非常に大きいのである。

残る一つは Student Activities Board というもので週末の行事を計画し実行する大学の一機関である。学生は任意意志で、一学期に十・五ドルの活動費を払う。これを払った者は、大学病院の医療費が無料とか、各種の施設を使えるという利点があるので、殆んどの方が払っているようである。この資金によってこの機関は、毎週各種の行事を運営する。映画、音楽会その他一週間置きぐらいに百五十キロぐらいのセントルイスまで買物バスを走らせ、その費用の一部を負担したりもする。娯楽施設の何もない小さな大学町ではこれらの週末の行事が、唯一のレクリエーションといえるであろう。ウィークデイには、授業をさぼらずまじめに出席し、週末には、学生会館や、あちこちの講堂で開かれる行事に参加するのだから、学生にとって、まさに大学は、唯一の生活の場と言っても過言でなからう。